

行為のなかの意図？
——現代現象学とハイデガー——

池田喬（明治大学）

冷蔵庫から缶ビールを取ろうとして、書斎の椅子から立ち上がり、キッチンに入り、電気を付け、冷蔵庫の扉を開き、ビールをつかむ。

自動車で職場に行く途中、ギアを2から3に変える。

テニスをプレイしているとき、飛んできたボールを跳ね返す。

手書き原稿をタイプしているとき、キーボードのFを押す。

無意識のように行っていることでも、「何をしているのか」と聞かれれば、私たちは観察によらずに即座に答えられる。観察知とは根本的に異なるこの自己知の存在は、驚嘆の対象になっただけでなく、ある行為がどういう記述のもとで意図的であるかを識別するための基準という、行為論にとって重大な機能を担わされてきた。しかし、即答できるという事実を確認することは、その行為の最中に私がこの行為をいかに経験しているのか、意図的であるとはいかなる心的状態なのかを解明することではなく、むしろこうした問いを謎として残す。さらに言えば、この事実確認は、その経験のなかに意図と呼ぶにふさわしい何かが含まれていることを確証するわけでもない。先の謎を探究した結果、自らの行為について非観察的に報告できるという事実はその行為の意図性とは関係ない、という可能性も残されている。

本発表の目的は、J. サールが「行為のなかの意図 (intention in action)」と呼んだ志向性を現象学的に探究することである。ではなぜ、行為のなかの意図を「現代現象学とハイデガー」なる副題を掲げる考察の対象にするのか。

まず歴史的理由がある。サールは、二〇世紀の哲学界において現象学の専用領域のように語られてきた志向性を論理分析と彼が呼ぶ手法で体系的に説明した第一人者であるのみならず、それによって現象学は用済みになったと考えていた。彼はカリフォルニア大学バークレー校の同僚であったハイデガーの解釈

者 H. ドレイファスと、それぞれ分析哲学と現象学の代表者として、行為のなかの意図をめぐる論争を九〇年代から十年近く繰り広げた。サール・ドレイファス論争は、行為や志向性への現代現象学的なアプローチを展開するための良い出発点になろう。

次に、本企画に先行して出版された書籍『現代現象学』にある補足をしたいからである。この書で現象学の特徴付けとして挙げられる「一人称的観点」からの「経験」の探究という点は疑いなくある哲学が現象学であるための最低条件である。しかし、私見によれば、現象学の決定的特徴は、一人称的経験のなかでも前反省的・非明示的な水準のそれを探究することにある。つまり、無意識的と呼ばれ、三人称的視点からの科学的探求に解明を任せる他ないように見える領域を、現象学は一人称的経験に踏みとどまって哲学的に研究するという困難な課題に関わっている。サールが明示的な先行意図から区別した行為のなかの意図はそういう領域に属し、現象学の実力が試されるトピックだと言えよう。

さて、当日は以下のような内容を扱いたい。

サールは、行為のなかの意図を、知覚や信念と並ぶ志向性の一部と見なし、行為することの「経験」を行為の充足条件の満足という点から説明した。その条件には、腕を上げようと意図しているのであれば、腕が上がっているという身体運動の現前と、この意図によってその身体運動が引き起こされているという因果的自己言及が含まれる。だが、ドレイファスによれば、因果的自己言及は現象学的には（一人称的経験についての主張としては）自明でなく、行為における因果の方向を「心から世界へ」（そして、適合の方向を「世界から心へ」とする）サールの考えは前反省的水準においては転倒されるべきである。テニスのボールを打つとき、私は、打とうという意図のために打つ身体運動を実行しているというより、そこにボールがあるために手を伸ばしているとより良く記述される経験をしているのだ。

サールとドレイファスの両者に学んだ S. ケリーは、前反省的な行為のフローは、知覚された環境が行為をアフォードするという点からより良く説明できるとするだけでなく、この過程に意図と呼びうるようなものはないという挑発的考えを示唆した。彼によれば、タイピストが「F と打とうとして G を打ってしまった」と報告したとしても、その事実は、行為の進行中に F の打鍵が本人に（非明示的にであつても）意図されていたと述べることを正当化しない。

事後的報告には必ずしも依拠できないというケリーの警告を、私は、意図の概念を先行意図に限定する存在論的儉約と解し、ありうる反論からこの立場を擁護したい。つまり、もしタイプストが F を打とうと意図していたのでなければ G を打ったことが誤りであることを理解できなくなる、という反論だ。私の答えは、この誤りは意図したことをしなかったことではなく、不注意だったこと——よく見ていなかった——という点からより良く説明されるのであり、意図の言語は知覚の言語に取り替えられる、というものである。

この見解は、ドレイファスによる適合の方向の逆転と合致するだけでなく、ハイデガーによるアリストテレス倫理学（とりわけフロネーシス概念）の認知主義的解釈にも接近する。さらに、「配視（Umsicht）」概念を中心とする『存在と時間』の知覚論は、行為のなかの意図に代わる「行為のなかの知覚」の現象学的分析だと正当に言える。これらを指摘しつつ、意図の概念の軛からの解放によって、知覚的行為のフローの現象学にどれほど豊かな探究領域が開かれるかを示したい。